

3	学校名 住田町立世田米小学校 外4校	29～32
---	--------------------	-------

平成29年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

子どもたちに新しい時代を切り拓くために必要な資質・能力や心の豊かさを育成するため、小・中・高等学校の滑らかな教育の接続を活かして、新たに教科「地域創造学」を新設した場合の教育課程、指導方法及び評価方法等の在り方に関する研究開発

2 研究の概要

自立して生き抜く力を身に付け、他者と協働してより豊かな人生や地域づくりを主体的に創造することのできる人材の育成を目指して、小学校から高等学校までが一貫して新設教科「地域創造学」を実施するために、12年間の教育課程と指導方法、評価方法等の開発を行う。具体的には以下の5点について取り組み、提言を行う。

- 新しい時代を切り拓くために必要とされる資質・能力の設定
- その資質・能力を育成するための教育課程の編成や効果的な指導方法の開発資質・能力を評価するための具体的指標の開発
- 小学校では生活科、道徳、外国語活動及び総合的な学習の時間を、中学校では道徳、総合的な学習の時間を、高等学校では総合的な学習の時間の一部を、それぞれ新設教科「地域創造学」の時間として創設し実施
- 新設教科に関するアンケート調査や外部評価を効果的に活用し、教育課程等の在り方を検証

3 研究の目的と仮説等

（1）研究の目的

岩手県の中山間部に位置し、豊かな自然に恵まれた住田町は、人材の流出、地域の疲弊・衰退への不安という課題に直面してきた。町及び教育行政はこれらの課題に向き合い、中・長期的な展望に立った施策展開を急務と捉えている。人材育成は将来にわたって持続可能な町の姿を描く上で最重要課題であり、町民の寄せる期待も大きい。

本研究開発は、町教育研究所が町内の小・中学校及び県立高校と連携し、自立して生き抜く力を身に付け、他者と協働してより豊かな人生や地域づくりを主体的に創造することのできる人材の育成を目指し、取り組むものである。この目的を達成するため、小学校から高等学校までが一貫して新教科「地域創造学」を中核に据えた教育課程を実施することで、人材育成が図られると考えた。この教科を据えた教育課程は、全ての校種で「社会的実践力」を12年間という長いスパンで実施していくことや、地域と学校が子どもの成長についての展望をこれまで以上に共有することが、人材育成に関わる関係者の参画を促し、地域の活性化にもつながることを期待し、編成を行うものである。

（2）研究仮説

新教科「地域創造学」において、小学校から高等学校までが、目指す資質・能力「社会を創造していくことのできる実践力（社会的実践力）」を共通に目指し、以下により、新しい時代を切り拓く心豊かな人材を育成することができるであろう。

(3) 教育課程の特例

以下の特例を平成30年度から実施することに向けて、準備を行った。

- ① 小学校では、生活科、道徳、外国語活動及び総合的な学習の時間を減じて、全学年において「地域創造学」を1年生106時間、2年生110時間、3、4、5、6年生では90時間設定する。
- ② 中学校では、全学年において、道徳、外国語及び総合的な学習の時間を減じて「地域創造学」を1年生では62時間、2、3年生では82時間設定する。
- ③ 高等学校では、総合的な学習の時間の中で「地域創造学」の学習を行う。

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

社会的実践力を効果的に育む教育課程編成のために、本年度は以下の取組を行った。

- ① 育成したい資質・能力を、現在の学校や地域の抱える課題と照らし合わせて明確化

研究1年次である29年度は、本町の5つの学校において、「地域創造学で育成すべき資質・能力とは何か」検討を行った。各校で検討した資質・能力を町教育研究所が分析・整理し、大きくは3つの社会的実践力（自律的活動力、人間関係形成、社会参画に関する力）を更に細分化して、9つの力を目指す方向性を確認した。（表）

表3-1 社会的実践力のとらえ

資質能力	内容	観点
社会的実践力	A 自律的活動力 社会と関わる際の基本的な資質としての「主体性」や「意欲」に関する内容	1 自己肯定感 自己の現在の姿を見つめ、良さや課題を認識することのできる力。
		2 感じとる力 情報を自分のこととしてとらえ、主体的な姿勢で向き合い、よさを見出すことのできる力。
		3 課題解決力 身の回りにある課題や問題を発見し、その解決方法を見出す力。必要な情報を収集・分析・活用することや、解決に向けての計画を見通す力も含む。
	B 人間関係形成 協働する際に必要となる、コミュニケーションに関する内容	1 他者と向き合う（受容） 多様な他者の考えや立場を理解した上で、相手を尊重することのできる姿勢。
		2 対話への参加（共有） 相手との違いを理解した上で、自分の考えを伝えながら対話を続ける力。
		3 協働 目標達成のために、他者と協力して活動できる力。議論し合ったり、集団活動を統制したりする力も含む。
	C 社会参画 今後どのように「社会」をつくっていくのか、主体的に貢献していこうとする態度や社会づくりへの提案ができる内容	1 価値を見出す力 かかわる対象である社会のことを理解したり、そのよさ・価値を認識したりする力。
		2 創造する力 望ましい未来に向かって、新しい視点や価値観を創造していく企画力。
		3 提言する力 自らの考えたことやイメージしていることを自覚し、見通しを持って計画したことを周囲に発信し、行動に移すことで提言をする力。

さらに、①に基づき、幼児教育も含め、小学校～高等学校までの12年間で5つのステージに分け、幼児・児童・生徒の発達段階を踏まえた各ステージで育む資質・能力の系統表（試案）を作成した。

表3-2 社会的実践力のとらえを各ステージに整理したもの（第1次案）

[illegible]

【5つのステージの設定理由】

本研究では、小学校～高等学校までの12年間を、第1ステージに幼児教育の最終年である年長児を加えて5つのステージに分けている。

これまでも本町の教育研究では、保育士、小・中学校、高等学校の教員が交流を図りながら実践に取り組んできた経緯がある。これを強みにして、これから育てたい資質・能力の確実な育成に向けて、接続学年の系統性を大切にしたい滑らかな接続が図られるよう、校種をまたぐ5つのステージを設定した。

研究を通じて、幼児・児童・生徒の育ちのつながりをより強く意識すると共に、ステージの区切りに基づいた、新教科のカリキュラム開発について、新たな視点を持って取り組んでいく。

② 評価方法の研究

①の系統表（試案）に基づき、地域創造学を中核に据えた教育課程で育む社会的実践力を継続的に見取っていくための心理尺度作成に着手した。この尺度は質問紙によるものを想定しており、結果を②の系統表（試案）の再整理に反映させていく。

③ 新教科の目標の修正

新教科「地域創造学」の教科目標と育むべき資質・能力の検討を行った。これを基に、教育課程を実施する。

第1 目標

住田町及び近郊地域社会をフィールドにした横断的・総合的な学習を、探究的な学習活動を意図的・計画的に行うことを通して、新しい時代を切り拓き、社会を創造していくための社会的実践力を身に付けた心豊かな人材を育成することを目指す。

第2 目指す資質・能力

A 自律的活動に関する内容

探究的・体験的な学習を通じて育成する資質・能力を以下のように設定する。課題解決「意欲」として現れるたくましく生き抜く力を身に付ける。

（1）自己肯定感

自己の現在の姿を見つめ、良さや課題を認識することのできる力

（2）感じとる力

情報を自分のこととしてとらえ、主体的な姿勢で向き合い、よさを見出すことのできる力

（3）課題解決力

身の回りにある課題や問題を発見し、その解決方法を見出す力。必要な情報を収集・分析・活用することや、解決に向けての計画を見通す力も含む。

B 人間関係形成に関する内容

自分と違った価値観や考えを持つ他者と、対話や議論をはじめとする多様な受容と共有の体験を重ねながら、協働して活動していくための、コミュニケーションの力を身に付ける。

（1）他者と向き合う（受容）

多様な他者の考えや立場を理解した上で、相手を尊重することのできる姿勢。

（2）対話への参加（共有）

相手との違いを理解した上で、自分の考えを伝えながら対話を続ける力。

（3）協働

目標達成のために、他者と協力して活動できる力。議論し合ったり、集団活動を統制したりする力も含む。

C 社会参画に関する内容

今自分たちが生きている社会の中の自然や伝統、文化も含めたよさや価値を認識するとともに、課題を含めて深く学ぶことを体験しながら、望ましい未来に対する新たな視点を持つことや、企画・イメージしていることを具体化するための提案などができる主体的社会参画のできる力を身に付ける。

（1）価値を見出す力

かかわる対象である社会のことを理解したり、そのよさ・価値を認識したりする力

（2）創造する力

望ましい未来に向かって、新しい視点や価値観を創造していく企画力。

（3）提言する力

自らの考えたことやイメージしていることを自覚し、見通しを持って計画したこ

とを周囲に発信し、行動に移すことで提言をする力

第3 内容

(1) 住田町及び近郊地域の人、もの、ことに関わりながら、探究的に思考することを繰り返しながら行う横断的・総合的な学びを展開する。

(2) 学習者である児童・生徒が、より実感を持って学習に取り組み、主体的に学ぶ姿勢や態度を引き出すために、住田町及び近郊地域の人・もの・ことと関わる、体験活動を適切に位置づけた学びを展開する。

※ 平成30年度は、研究初年度に検討した地域創造学年間指導計画を基にした実践

④ 新教科と既存教科との関連を確認

現在明らかにするため協議している「育てたい資質・能力」は3頁で述べたように、「自律的活動に関する力」、「人間関係形成に関する力」、「社会参画に関する力」からなる社会的実践力であるが、これらの力は「地域創造学」の中だけで育つものではなく、各教科等でも育てている汎用的な力である。各教科等で育てている力を分析し、「地域創造学」が担う資質・能力の育成はどのように関連し、一体的に育成していけばよいのか、整理していく。

表3-3 社会的実践力のとらえと各教科・領域との関連の検討表（試案）

重点を置く観点は◎○で表示。全ての観点を全ての教科で育む。

資質・能力	観点	地域創造学の とらえ	地域創造学	幼児教育	国語	社会	算数 数学	理科	生活	音楽	図工美術	家庭	技術	体育	道徳	特活	英語 外国語
A 自律 活動	1 自己肯定感	自己の現在の姿を見つめ、良さや課題を認識することのできる力。	◎														
	2 感じとる力	情報を自分のこととしてとらえ、主体的な姿勢で向き合い、よさを見出すことのできる力	◎														
	3 課題解決力	身の回りにある課題や問題を発見し、その解決方法を見出す力。必要な情報を収集・分析・活用することや、解決に向けての計画を	◎														
B 人間 関係	1 他者と向き合う (受容)	多様な他者の考えや立場を理解した上で、相手を尊重することのできる姿勢。	◎														
	2 対話への参加 (共有)	相手との違いを理解した上で、自分の考えを伝えながら対話を続ける力。	◎														
	3 協働	目標達成のために、他者と協力して活動できる力。議論し合ったり、集団活動を統制したりする力も含む	◎														
C 社会 参画	1 価値を見出す力	かかわる対象である社会のことを理解したり、そのよさ・価値を認識したりする力	◎														
	2 創造する力	望ましい未来に向かって、新しい視点や価値観を創造していく企画力。	◎														
	3 提言する力	自らの考えたことやイメージしていることを目覚し、見通しを持って計画したことを周囲に発信し、行動に移すことで提言をする力。	◎														

⑤ 年間指導計画の作成について

体験活動を効果的に位置付け、各教科等との関連を分析した資質・能力を育てていくために、作成した年間指導計画をもとに授業実践の充実を図る。更に子どもの学びの状況と重ねながら、よりよい年間指導計画へと改善する。これは、学校の職員が計画的に指導を行うという目的のみならず

「この町や社会とどう関わり、どう生きていきたいのか」を考えながら生きる子どもたちを育成するためには、教員自身もどのように「社会」をとらえるのか、活発に議論していく必要がある。子どもたちの未来をどう見通すのか、共通理解を図りながら、地域創造学の各学年の単元構成や効果的な指導方法を探っていきたい。

住田町立世田米小学校

[illegible]

	実施内容等
第 1 年次	(1) 新教科「地域創造学」新設の準備 ①小中高 1 2 年間の系統的教育課程の研究 ② 育成したい資質・能力を、現在の学校や地域の抱える課題と照らし合わせて明確化 ③ 育成したい資質・能力と教科の内容、指導と評価方法の在り方についての検討 ④新教科と既存教科との関連を確認 ⑤新教科の目標の修正 ⑥新教科の評価規準作成と評価方法の研究（試案の作成） (2) 小中高の系統的指導のための各種合同研修会等の実施 異校種の教職員（保育士も含む）が4つの部会に所属し、それぞれの部会が掲げたテーマを軸に実践の交流を行うことで、視点の違い等についての気づきが生まれた。 (3) 社会的実践力の把握と分析 ① 児童・生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査 ② 各種調査（全国学力・学習状況調査や心理尺度等）との関連についての分析及び今後の検証に向けての評価準備

	運営指導委員の指導を受けながら、社会的実践力を継続的に見取っていくための心理尺度作成に着手した。本年度中に実施の予定である。この尺度は質問紙によるものを想定しており、結果を社会的実践力の系統表（試案）の再整理に反映させていく。 （４）研究開発実施に関する体制の整備 ① ４年間を見通した研究計画及び運営指導委員会、研究組織の編成 ② 保護者・地域との連携のため、周知、広報活動の展開 ③ 運営指導委員会による評価を実施し、第二年次の計画を作成 ④ 近い将来、本研究に幼保連携型認定こども園を加えるため、保育園からの移行準備を進め、新たな幼児教育課程について検討
--	---

（３）評価に関する取組

	評価方法等
第１年次	（１）研究開発委員会と運営指導委員会（年３回）の開催 ① ４年間の研究について具体的内容や方向性の決定 ② 第一年次の実践研究についての学術的評価 （２）児童・生徒の実態把握を行い、変容等の研究成果を確かめる評価の在り方を検討 ① 全国学力・学習状況調査（４月）、岩手県小・中学校学習定着度状況調査（１０月）、岩手県中学１年生英語確認調査（CAN-DOテスト）（１月）、岩手県中学校新入生学習状況調査（４月）、岩手県高等学校１年・２年基礎力確認調査（４月）を、新設教科「地域創造 学」の目指す資質・能力の観点から分析し、評価計画を作成 ② 心理尺度、パフォーマンス評価等を用いた児童・生徒への学習評価と分析の方向性について検討 ③ 「非認知的能力の見取り」及び「認知的能力の測定」双方の協議 （３）小・中・高等学校の一貫した教育課程の在り方について、各校の実践事例交流と、成果・課題の明確化 ① 小・中・高等学校教員が参加する全体会を５月、７月、１月、２月（２回は講師招聘による講演会等を予定）に開催した。 ② 本研究の成果と課題についての評価を適切に推進できるように、研究所の組織を改編した。

５ 研究開発の成果

（１）実施による効果

① 児童・生徒への効果

今年度は、現在児童・生徒には社会的実践力がどのように育っているのか、実態把握するための心理尺度の検討を進めてきた。検証方法の一つとして考え作成する尺度は、目指す資質・能力をステージ毎に表した系統表（試案）を基にするものであるが、この系統性が妥当であるかも含め、検討する必要がある。

② 教師への効果

今後の研究継続に向けて、校種をまたぐ研究であることや、指導方法や評価のみを対象とするのではなく「教育課程」を考えていく課題としていることから、その原動力となる「教師の参画意識醸成」を最重要課題として取り組んだ。

これまでも町の研究所事業の中で小・中・高等学校の教員や、保育士が共に情報交流する場はあったが、4つの部会の部長を各小・中学校副校長が務め、リーダーシップを発揮して取り組んできたことが、学校毎の取組にもよい影響をもたらしてきた。あわせて、地域創造学については、各学校の教務主任・研究主任が連携して研究推進にあたり、学校における「目指す資質・能力」を検討するワークショップ型協議や、次年度の年間指導計画作成に関する校内研究会について、主体的に運営を行ってきた。

このような取組をとおして、これまで「与えられることを実施する」となりがちであった教育課程に関する考えが、参画することによって「文部科学省研究開発学校事業」の意義を前向きに受け止め、主体的な考えに変容した教員も現れ始めている。

また、目指す資質・能力の検討や、これまでの教育課程の見直しを行う過程で、自分たちの指導の在り方について振り返り、課題を見出したり、県外への研究開発学校等視察に積極的に参加したりするなど、多くの教職員がよりよい教育実践を求めて前向きに取り組む姿を示している。

次年度からの実践を通し、児童・生徒への理解をこれまで以上に深めながら、学校毎の実践を充実させ、教員の指導力や専門性の向上が一層図られるようにしていきたい。

③ 保護者等への効果

本研究開発学校事業への指定が決定したことに対する保護者や地域住民の関心は、数多くの問い合わせ等から見ても、大変高いと感じる。

本年度は町内ケーブルテレビ等で研究の概要を説明する番組を作成したり、各学校のPTAへの説明を中心に周知を図ったりしたが、効果検証についての方策や協力体制へのつなげ方などを具体的に検討していきたい。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

① 新教科「地域創造学」実施に伴う、評価の在り方の検討について

新教科「地域創造学」を含む教育課程が、児童・生徒にどのような影響を与えるのか、適切な評価の在り方を検討していく必要がある。校種や児童・生徒の発達段階の違うことから、これまで同様、各校の協議と異校種での協議を続けていく。

心理尺度については、質問紙によるものを想定しており、継続的に測定する。より客観的である。

作成する年間指導計画の単元に合わせ、ポートフォリオを活用して多角的評価の実践学習者自身の「振り返り」がより充実する学びとなるために、ルーブリック等を活用したパフォーマンステスト等の方法を検討している。

② 新教科「地域創造学」を中核とした12年間の教育課程の編成

本年度は、5つの学校において、「育成すべき資質・能力とは何か」について検討を行い、町教育研究所が分析・整理し、目指す方向性を確認した。また、目指す資質・能力の系統性についても試案を作成し、年

間指導計画の作成等に生かす準備を進めてきた

が、12年間の教育課程全体がこれらの検討のみでは十分ではないため、引き続き検討を要する。社会的実践力が育っていくその発達の段階や各校種の到達点を共有していくまでには更に時間を必要とする。

平成30年度からは整理した力を新設教科「地域創造学」及び各教科・領域で育んでいくための教育課程について、年間指導計画を基に実施しながら、検証・改善を図っていく。

③異校種間の共通理解

本研究には、異校種の公立学校教員が関わることから、その共通理解を図ることには、様々な困難がある。

これまで、小・中・高等学校教員が参加する全体会を開催し、今後目指すべき教育の流れについて共有したり、4つの部会に分かれて実践事例交流や研究協議を行ったりすることを通じて交流を図ってきた。

しかし、「交流」の域を脱して、議論や新たな価値を見出していく段階までは、まだ課題が多くある。年に4回「全体会」として開催してきたこれまでの積み重ねを生かしながら、異校種間の理解を深めるための機会を創出する。

④運営指導委員からの指導体制について

本年度より、7名の運営指導委員の先生方のご指導を頂きながら、研究を推進していくことが可能となった。運営指導委員会を開催する上で、過半数の指導委員が一堂に会する機会を持つことの難しさがあり、個別にご指導を頂いたり、1～3名の指導委員の方々に訪問して頂いたりしながら直接のご指導を受けてきた。本年度最終となる第3回を3月に予定している。

次年度についても引き続き継続的な指導体制を整えながら進める。

⑤持続性のある研究体制の構築

12年間の子どもの育ちを考える研究であることから、継続的に検証や改善が可能な研究組織へと体制を工夫したい。町の教育研究所の組織体制及び他部局との横断的な連携の在り方について検討を進めている。

小学校 教育課程表（平成 3 0 年度）

	各教科の授業時数									道徳	外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動	新設教科	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育						
第 1 学年	306		136		0 (-102)	68	68		102	30 (-4)			34	106	850
第 2 学年	315		175		0 (-105)	70	70		105	30 (-5)			35	110	910
第 3 学年	245	70	175	90		60	60		105	30 (-5)	0 (-15)	0 (-70)	35	90	960
第 4 学年	245	90	175	105		60	60		105	30 (-5)	0 (-15)	0 (-70)	35	90	995
第 5 学年	175	100	175	105		50	50	60	90	30 (-5)	35 (-15)	0 (-70)	35	90	995
第 6 学年	175	105	175	105		50	50	55	90	30 (-5)	35 (-15)	0 (-70)	35	90	995
計	1461				0					180	70	0	209	576	5705

中学校 教育課程表（平成30年度）

	各教科の授業時数									道徳	総合的な学習の時間	特別活動	新設教科	総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術家庭	英語					
第1学年	140	105	140	105	45	45	105	70	133 (-7)	30 (+5)	0 (-50)	35	62	1015
第2学年	140	105	105	140	35	35	105	70	133 (-7)	30 (+5)	0 (-70)	35	82	1015
第3学年	105	140	140	140	35	35	105	35	133 (-7)	30 (+5)	0 (-70)	35	82	1015
計	385	350	385	385	115	115	315	175	399	90	0	105	226	3045

○ 住田高等学校 教育課程表（平成30年度）

学校名 岩手県立住田高等学校
課程別 (全・定) 本分校別 (本・分)

学科名 普通科

教科	科 目	標準 単位数	1 年	2 年		3 年		備考
			共通 2・9 単位	共通 2・0 単位	選択 9 単位	共通 1・5 単位	選択 1・4 単位	
国語	語 総 国	4	⑤					分 割 履 修 (2・3 年) 分
	語 表 国	3					▲3	
	代 文 現	4		3		3		
	典 古	4		2		2		
地理 歴史	界 史 世	2		②				割 履 修 (2・3 年)
	本 史 現	4		②		③		
公民	代 社 現	2	②					
	治・経 政	2					●6 ー 2	
数学	学 数 I	3	③					学校設定科目 学校設定科目
	学 数 II	4		4				
	学 数 III	5					●6	
	学 数 A	2	2					
	学 数 B	2			▲3			
	学 探 数	4					4 ー	
	用 数 実	2					2 ー ●6	
理科	科学と人間生活	2	②					分割履修 (2・3 年) 基礎履修後に履修
	化 学 基 礎	2			③ ー △4		▲3	
	化 学	4			1 ー		△3	
	生 物 基 礎	2			③ ー △4		▲3	
	生 物 物	4			1 ー		△3	
保健 体育	体 育	7～8						分割履修 (1～3 年) 分割履修 (1・2 年)
	保 健	2	③	②		③		
芸術	音 楽 I	2	①	①				継続選択 (2・3 年)
	音 楽 II	2	②					
	音 楽 III	2			◇2			
	書 道 I	2					◇2	
	書 道 II	2			◇2			
外国語	コミュニケーション英語 I	3					◇2	分割履修 (2・3 年)
	コミュニケーション英語 II	4	③					
	コミュニケーション英語 III	4		4				
	英語表現 I	2				4		
	英語表現 II	4	2					
	基礎	2			◇2		◇2	
家 庭	家 庭 基 礎	2	②					
情 報	社 会 と 情 報		②					
共通教科・科目の単位数の計			29	26・29		22・29		
報 告 商業	ジ ネ ビ ス 基 礎	2～					▲3	
	報 情 処 理	6 2			▲3			
家庭	フ ェ ィ ュ ア ル デ ザ イ ン	～6					4 ー	
専門教科・科目の単位数の計			0	0・3		0・7		
ホームルーム活動			8	1	1	1		
総合的な学習の時間 (地域創造学を含む)				①		①		
合 計			31	31		31		
備 考			※ 昨年度において ▲3 数学B を選択した生徒は、3 年で ●6 (政治・経済と数学探求または数学III) を履修する。 ※ 昨年度において ▲3 情報処理 を選択した生徒は、3 年で ●6 実用数学とフードデザインを履修する。 ※ 3 年において ▲3 理科の基礎科目 を選択する生徒は、2 年で選択していない科目を履修する。					

学校等の概要

1 学校名 住田町々立世田米小学校（スミタチョウリツセタマイショウガッコウ）

校長名 佐 木英雄

2 岩手県気仙郡住田町世田米字川向55- 1

電話番号 0192-46-3135

3 学年・課程・学科別 幼児・児童・生徒数、学級数

F A X 番号 0192-46-3136												計	
第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年							児童数	学級数
20	1	20	1	22	1	21	1	18	1	27	1	128	6

4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	養護教諭	講師
1	1				8		1		1	2
A L T	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
		1		15						

1 学校名 住田町立有住小学校（スミタチョウリツアリスショウガッコウ）

校長名 都澤宏典

2 岩手県気仙郡住田町上有住字山脈地5-2

電話番号 0192-48-2014

F A X 番号 0192-48-2088

3 学年・課程・学科別 幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
9	1	15	1	15	1	10	複式 1
						5	複式 1
						18	1
						72	5
						知 1	
						2	1

4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	養護教諭	講師
1	1				6		1			1
A L T	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
		1		11						

1 学校名 住田町立世田米中学校（スミタチヨウリツセタマイチュウガッコウ）

校長名 佐藤智一

2 岩手県気仙郡住田町世田米字大崎72-1

電話番号 0192-46-3155

F A X 番号 0192-46-3156

3 学年・課程・学科別 幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
20	1	17	1	24	1	61	3
		知1	1			知1	1

4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1				7		1			1
A L T	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
		1		12						

1 学校名 住田町立有住中学校（スミタチヨウリツアリスチュウガッコウ）

校長名 三浦政勝

2 岩手県気仙郡住田町上有住字櫃割12-1

電話番号 0192-48-2020

F A X 番号 0192-48-2011

3 学年・課程・学科別 幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
16	1	19	1	15	1	50	3

4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1				6		1			1
A L T	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
		1		11						

1 学校名 岩手県立住田高等学校（イワテケンリツスミタコウトウガッコウ）
校長名 鈴木 広樹

2 岩手県気仙郡住田町世田米字川口12-1
電話番号 0192-46-3141
F A X 番号 0192-46-3144

3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数、学級数

課程	学科	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全日制	普通科	33	1	32	1	38	1			10	3
	計	33	1	32	1	38	1			3	3
計		33	1	32	1	38	1			10	3

3

4 教職員数

10

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	事務職員	司書	講師
1	1				9		1				4
A L T			スクールカウンセラー	事務職員	司書	計					
		2		18							

ダミー

色上

クリーム

表

ダミー

色上

クリーム

裏

3	学校名 住田町立世田米小学校 外4校	29～32
---	--------------------	-------

平成29年度研究開発実施報告書

1 新設の教科「地域創造学」について

(1) 基本的な考え方

岩手県の中山間部に位置し、豊かな自然に恵まれた住田町は、人材の流出、地域の衰退への不安などの課題に直面してきた。町及び教育行政はこれらの課題に向き合い、中・長期的な展望に立った施策の展開が必要であると捉えている。人材育成は将来にわたって持続可能な町の姿を描く上で最重要課題であり、町民の寄せる期待も大きい。こういった背景から、町教育研究所が町内の小・中学校及び県立高校と連携し研究開発に取り組むこととなった。

未来にわたって発展していく社会を創造していくためには、自らの暮らす地域へ

目を向け、主体的に考えるきっかけとなる。また、地域の中では、個人で考えをまとめられる範囲を超え、簡単には答えを導き出せないような課題について、多くの住民が協働で解決していかなければならない場面が多くある。このような場面で、粘り強く主体的な姿勢で、仲間とコミュニケーションを図っていくことは、望ましい社会づくりのための大切な姿勢である。さらに児童・生徒にとって、本物の社会体験を積むことは難しいが、地域環境や地域の課題を学習材にし、体験活動等を通じて地域づくりを実際に行う「主体者」として考え、提案しようとする経験を積むことは、将来社会を創造しようとする際の重要な力をつけることにつながると考える。

具体的には①「社会的実践力」を育むため「地域創造学」を据えた教育課程の編成、②「社会的実践力」を効果的に育む指導方法を探ること、③「社会的実践力」を評価するための具体的指標の開発を行うこと、を中心に目指す資質・能力の育成の在り方を明らかにしていく。

本研究においては、地域創造学を中核とした教育課程の編成が果たす役割を検証することを通して、上記目的を果たしていく。

2 社会的実践力とは

本研究で育成を目指す、「社会的実践力」とは、子どもたちが変化の激しい社会において、充実した人生を実現していくために、豊かな心を持ち、自ら主体的に未来の社会を創造していくことのできる力、と考える。この目指す力は、課題に直面しながらも、地域の未来の発展に向けて常に努力する町全体の姿勢として、脈々と受け継がれてきた考えとも一致するものである。住田町内の学校で「地域創造学」を中核に位置付けた教育課程を実施することにより、この力を目指す動きを、地域とも共有することができる。

本研究では、この「社会的実践力」を以下の3つの力の統合としてとらえる。

【自律的活動に関する内容】

まず、「社会と関わる」際の基本的な資質としての「主体性」や「意欲」に関する力である。本町各学校教育においても、子どもたちの意欲や主体性を常に大切に考え、教育課程が展開されているが、本研究として目指すのは、自然や人など、この地域ならではの環境と触れあい学ぶことによって育成する力である。ここには、個人としてたくましさを身に付けるだけでなく、仲間の存在を意識し、協働しながら社会に参画していく際に必要となる人間性や態度も含む。

【人間関係形成に関する内容】

次に、協働する際に必要となる、コミュニケーションに関わる力についてである。29年度の研究により、人間関係形成に関する力を「他者と向き合う力（受容）」「対話への参加（共有）」「協働」の3観点として整理した。主体的に未来の社会を創造していく「社会的実践力」としてのコミュニケーション能力は、複雑な能力の要素が必要となるが、本研究ではそれぞれの発達段階において目指す力を系統的に探っていく。小学校の低学年段階から、高等学校卒業段階までのコミュニケーション能力には大きな幅があり、基礎力や活用する技能も段階的に変化していくが、小学校、中学校、高等学校の連携をもとに研究していく本研究の特色を生かして、「社会的実践力」として必要なコミュニケーション力「人間関係形成に関する力」が12年間でどのように高まっていくのか、明らかにしていきたい。

【社会参画に関する内容】

この力は、今後どのように「社会」をつくっていくのか、主体的に貢献していこうとする態度や社会づくりへの提案ができる力を想定している。本町では、町内の人々の営みは全て教育条件として活用することが可能であると考えている。この地域の課題を、子どもたちが自身の課題として学ぶことで、より主体性を高く持った社会参画が可能になり、かつ深く学ぶことがこれからの子どもたちの生き方にもつながる力となることを目指す。本町研究での「参画」には、郷土を愛し、持続可能な社会づくりを目指す態度を支えるという意味で、「自然への畏敬の念」や、自然体験等を通じて育む「美しさや多様性に感動できる心」等の要素も含んでいる。これは、本町がこれまで長い歴史の中で大切にし、誇りにしてきたことでもあるが、「持続可能かどうか」、あるいは「伝統の尊重に基づく創造かどうか」、等の視点を忘れずに社会づくりを進めるために必要な要素でもある。非認知的な力を含む目標は、その指導方法も評価もより工夫していかなければ、成長を見取ることは難しいが、真に「社会を創造していくことのできる実践力」を校種間の連携を生かしながら育成していきたい。

研究1年次である29年度は、本町の5つの学校において、「地域創造学で育成すべき資質・能力とは何か」検討を行った。各校で検討した資質・能力を町教育研究所が分析・整理し、大きくは3つの社会的実践力（自律的活動力、人間関係形成、社会参画に関する力）を更に細分化して、9つの力を 目指す方向性を確認した。次に示した表が9つの力をまとめたものである。

資 質 能 力	内 容	観 点	
社会と関わる際の基本的な資質としての「主体性」や「意欲」に関する内容 実践力 運動 に関する力	A 主	1 自己肯定感	自己の現在の姿を見つめ、良さや課題を認識することのできる力
		2 感じとる力	情報を自分のこととしてとらえ、主体的な姿勢で向き合い、よさを見出すことのできる力
		3 課題解決力	身の回りにある課題や問題を発見し、その解決方法を見出す力。必要な情報を収集・分析・活用することや、解決に向けての計画を見通す力も含む。
B 協働する際に必要となる、コミュニケーションに関わる力。 関係形成に関する力	B 関	1 他者と向き合う（受容）	多様な他者の考えや立場を理解した上で、相手を尊重することのできる姿勢。 相手との違いを理解した上で、自分の考えを伝えながら対話を続ける力。
		2 対話への参加（共有）	
		3 協働	目標達成のために、他者と協力して活動できる力。議論し合ったり、集団活動を統制したりする力も含む。
C 今後どのように「社会」をつくっていくのか、主体的に貢献したいこうとする態度や社会づくりへの提案ができる内容 に関する力	C 関	1 価値を見出す力	かかわる対象である社会のことを理解したり、そのよさ・価値を認識したりする力
		2 創造する力	望ましい未来に向かって、新しい視点や価値観を創造していく企画力。
		3 提言する力	自らの考えたことやイメージしていることを自覚し、見通しを持って計画したことを周囲に発信し、行動に移すことで提言をする力。

– 19 –

表1-2 社会的実践力の捉えを各ステージに整理し直したものの

【5つのステージの設定理由】

- 20 —

3 新設の教科「地域創造学」の構築

(1) 新設教科「地域創造学」の教科目標について

検討した育むべき資質・能力を基に、新設教科「地域創造学」の教科目標（試案）の設定と教育課程を実施する準備を行った。

地域創造学 学習指導要領（試案）

第1 目標

住田町及び近郊地域社会をフィールドにした横断的・総合的な学習を、探究的な学習活動を意図的・計画的に行うことを通して、新しい時代を切り拓き、社会を創造していくための社会的実践力を身に付けた心豊かな人材を育成することを目指す。

第2 目指す資質・能力

探究的・体験的な学習を通して育成する資質・能力を以下のように設定する。

自律的活動に関する内容

自分自身の姿を適切に見つめ、周りの人・もの・ことと関わりながら、課題解決に対する見通しを持つことで、社会と関わる際の基本的な資質

(1) 自己肯定感

自分の現状や姿を「意欲」良しと課題を認識することのできる力を身に

(2) 感じとる力

情報を自分のこととしてとらえ、主体的な姿勢で向き合い、よさを見出すことのできる力

(3) 課題解決力

身の回りにある課題や問題を発見し、その解決方法を見出す力。必要な情報を収集・分析・活用することや、解決に向けての計画を見通す力も含む。

B 人間関係形成に関する内容

自分と違った価値観や考えを持つ他者と、対話や議論をはじめとするコミュニケーションの力を身に付ける。

(1) 他者と向き合う（受容）

多様な他者の考えや立場を理解した上で、相手を尊重することのできる姿勢。

(2) 対話への参加（共有）

相手との違いを理解した上で、自分の考えを伝えながら対話を続ける力。

(3) 協働

目標達成のために、他者と協力して活動できる力。議論し合ったり、集団活動を統制したりする力も含む。

C社会参画に関する内容

今自分たちが生きている社会の中の自然や伝統、文化も含めたよさや望ましい未来に対する新たな視点を持つことや、企画・イメージしていることを具体化するための提案などができる主体的社会参画のできる力を身に付ける。

(1) 価値を見出す力

かかわる対象である社会のことを理解したり、そのよさ・価値を認識したりする力

(2) 創造する力

望ましい未来に向かって、新しい視点や価値観を創造していく企画力。

(3) 提言する力

自らの考えたことやイメージしていることを自覚し、見通しを持って計画したことを周囲に発信し、行動に移すことで提言をする力

第3 内容

(1) 住田町及び近郊地域の人、もの、ことに関わりながら、探究的に思考することを繰り返しながら行う横断的・総合的な学びを展開する。

(2) 学習者である児童・生徒が、より実感を持って学習に取り組み、主体的に学ぶ姿勢や態度を引き出すために、住田町及び近郊地域の人・もの・ことと関わる、体験活動を適切に位置づけた学びを展開する。

今後は、本年度検討した地域創造学年間指導計画を基にした実践を、上記の目標や目指す資質・能力、他の教科・領域での学習内容と照らし合わせる作業を繰り返しながら、より具体的なものにすべく検討を重ねていく。

(2) 社会的実践力のとらえに基づいた年間指導計画の作成について

体験活動を効果的に位置付け、各教科等との関連を分析した資質・能力を育んでいくために年間指導計画を作成した。これをもとに指導実践を充実させていく。学校の職員が計画的に指導を行うという目的のみならず、学習者である生徒の学習に対する目的意識の醸成や、学びに関わる地域の関係者等と目指す児童生徒の姿の共有にもつながる。

「この町や社会とどう関わり、どう生きていきたいのか」を考えながら生きる子どもたちを育成するためには、教員自身もどのように「社会」をとらえるのか、活発に議論していく必要がある。子どもたちの未来をどう見通すのか、共通理解を図りながら、地域創造学の各学年の単元構成や効果的な指導方法を探っていきたい。

表3－1 地域創造学 年間指導計画（例）

第 6 学 年 地 域 創 造 学 年 間 指 導 計 画 (1 学 期)														
住田町立世田米小学校														
月	時	単元名	計	学習内容	育てる資質能力						評価規準			
					A 自立的活動力			B 人間関係形成力				C 社会参画力		
					1	2	3	1	2	3		1	2	3
4	20	我が町再発見～比べてみよう～、仙台市・平泉町・住田町～	1	学習ガイダンス		◎	○					単元の学習内容を理解し、主体的に活動しようとする意欲を持つことができたか。		
			2	見学の計画 役割分担 班を決める				○	○	◎			仲間と協力して見学の準備を行おうとする気持ちを持つことができたか。	
			3	見学の準備 事前学習		○	◎						・興味を持って見学先について調べることができたか。 ・仲間と協力して見学先について学ぶことができたか。	
			4	見学の準備 旅のしおり作成						◎			・見学に向けて意欲を持つことができたか。 ・仲間と協力して見学を成功させようとする気持ちを持つことができたか。	
			5	○○の見学 【見学場所】									・見学先で出会う人やものと積極的にふれあうことができたか。 ・仙台市・平泉町・住田町を比較しながら見学することができたか。 ・仲間と協力して見学することができたか。	
			6	○○○○										
			7	○○○○										
			8	○○○○										
			9	○○○○										
			10	○○○○										
			11	○○○○		○		○		◎				
			12											
			13											
			14											
			15											
5			16	発表会の準備		◎	○	○					・意欲的に発表の準備に取り組むことができたか。 ・仙台市・平泉町・住田町を比較する形式でまとめることができたか。	
			17											
			18											
			19	発表会					○	◎		◎	住田町のよさや課題について気づいたことを述べることができたか	
			20	【道徳】（郷土愛）		○						◎		
6			21	活動の振り返り		○						◎	◎	・活動を振り返り、今後の学校生活に生かそうとする気持ちを持ちとができたか。 ・住田町の自慢やよさについて振り返ることができたか。
			22											
			23											
		24												
		25												
		26												
		27												
		28												
		7	7	保育体験	22									
	23													
24														
25														

（3）年間指導計画改善のために

体験活動を効果的に位置付ける地域創造学において、学習者や指導者が探究のプロセスを共有し、意識して学習することは大切なことである。そのため、体験活動を伴う学習活動の指導方法については、その過程や成果について吟味していく。

本町での体験活動は、多くを総合的な学習の時間を中心として実践してきた。従って、指導の基本的な考え方として、①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現が発展的に繰り返される「探究的な学習」を通すこと、他者と協働して課題を解決しようとする学習活動を重視すること、充実した言語活動を活動の中に適切に位置付けることで思考力・判断力・表現力等の育成を図ること等は、校種に関わらず引き続き意識して指導にあたる。

各教科等における見方・考え方を総合的に活用して、広範な事象を多様な角度から俯瞰してとらえ、実社会・実生活の課題を探究し、自己の生き方を問い続けるという地域創造学の特質に応じた見方・考え方が働かされるような探究のプロセスの在り方を探っていく。

以下の表は地域創造学における探究のプロセスの試案である。

表3-2 地域創造学における探究のプロセス（試案）

ス テ ー ジ	学 年	ステージのテーマ (主なねらい)	① 問題の理解	② 情報収集	③ アイデアの 拡散と収束	④ アイデアの 具現化	⑤ 改善	⑥ まとめと 振り返り
			・見る、聴く ・理由や根拠を 問う ・気づく ・共感する	・調べる ・整理する ・分析する ・課題を焦点化 する	・解決案を発想 する ・解決策を組み 立てる ・解決策を見な おす	・解決策の実施 計画を構想する ・解決策を実践 する	・実践を対象の 立場から問い 直す ・実践に不足 していること を付け加える ・実践を修正 してやり直す ・実践を繰り返す	・実践の成果と 課題をまとめ て発表する ・実践後の自分 の思いや願い を伝える ・学びの意味や 価値を表現する
1	6歳 小1	就学前教育 ()						
	小2							
	2小3 小4	学校生活の充実 ()						
	小5							
	3小6 中1 中2	小中連携 ()						
4	中3 高1	中高連携 ()						
	高2							
5	高3	高大連携 ()						

(4) 教育課程の特例について

以下の特例を平成30年度から実施することに向けて、準備を行った。

- ① 小学校では、生活科、道徳、外国語活動及び総合的な学習の時間を減じて、全学年において「地域創造学」を1年生106時間、2年生110時間、3、4、5、6年生では90時間設定する。
- ② 中学校では、全学年において、道徳、外国語及び総合的な学習の時間を減じて「地域創造学」を1年生では62時間、2、3年生では82時間設定する。
- ③ 高等学校では、総合的な学習の時間の中で「地域創造学」の学習を行う。

【小学校生活科について】

- ・1,2学年ともに、全ての時数を地域創造学として実施する。

【小・中学校道徳について】

- ・小学校1学年については4時間、小学校2学年～中学校3学年については5時間を地域創造学として実施することとした。
- ・「特別の教科 道徳」の内容項目のうち、次に示すものを地域創造学として指導することとした。
 - B 主として人との関わりに関すること「相互理解、寛容」
 - C 主として集団や社会との関わりに関すること
「伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」
 - D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること「自然愛護」

【小学校外国語活動について】

・H30年度は小・中学校の新学習指導要領実施移行期間開始の年度にあたる。次の表のように、外国語活動と地域創造学の中で外国語に関わる学びを実践していく。

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
外国語活動の授業時数			0	0	35	35	133	133	133
地域創造学の中の外国語に関わる学習（地域創造学の総時数）総	10 (106)	10 (110)	15 (90)	15 (90)	15 (90)	15 (90)	7 (82)	7 (82)	7
授業時数の内外国語に関する授業時数（総時数）	10 (850)	10 (910)	15 (960)	15 (995)	50 (995)	50 (995)	140 (1015)	140 (1015)	140 (1015)

4 教育研究所を母体とした「地域創造学」を柱とする教育課程推進に向けた体制づくりに向けて

- (1) 具体的な取組：教育研究所各部会での取組
(各部会研究のまとめレポートは別冊資料参照)

町内学校の教員が、校種を越えてその実践を交流し合い、現在の取組について多角的に見渡しながら「地域創造学」構築を目指して行ったことが、教員の意識醸成につながった。4つの部会の部長は小・中学校の副校長が務め、そのリーダーシップを発揮して部会の運営に当たったことも、活動推進の原動力となった。

【森林環境学習研究部会】

テーマ 「自律的活動力」「人間関係形成力」「社会参画力」の育成

～保・小・中・高の連携を通して～

目指す子どもの姿

五感を通して自然にふれ、その美しさや多様性に感動し、郷土を愛する園児、児童、生徒

研究の内容と方法

- 1 内容 (1) 部員による森林環境学習における「めざす資質・能力と学習内容」の実践 (2) 各校種での森林環境学習における「めざす資質・能力と学習内容」の交流

研究活動実践の概要

- 1 各校種の森林環境教育の主な実践内容

- (1) 保育園 森の保育園 春夏秋冬（年4回）実施
- (2) 小学校
 - ① 1,2年生 秋の種山学習
 - ② 2,3年生 世小：森の積み木教室（間伐材の活用） 有小：河辺の虫
 - ③ 4年生 気仙川水生生物調査学習
 - ④ 5年生 世小・有小：栗木鉄山跡の見学 有小：住田の製鉄学習
 - ⑤ 6年生 世小・有小：あつもりそう学習会 有小：住田の川砂金学習
- (3) 中学校
 - ① 種山体験学習、間伐体験学習、木工団地見学（世中1年）
 - ② 種山散策（有中1年）間伐体験（有中2年）木工団地見学（有中3年）
- (4) 高等学校（地域文化選択講座の中の木工体験・森の保育園のボランティア実施）

研究の成果と課題

1 成果

(1) 今年度は、研究授業は設定しなかったものの、各校・園でそれぞれ園児・児童・生徒の発達段階に応じた3つの「つきたい力」を明確した実践内容を明らかにし交流することができた。

(2) 保・小・中・高のそれぞれの実践の交流から、自校・園以外の取り組みを知ることができ、「森林環境学習」としての系統性を考えることができた。例えば、中学校・高校では、もっと社会に踏み出す活動が良いことやそのために地域と結びつくことが必要であること。高校では、役場の農政課等と一緒に活動していることが分かった。

2 課題

(1) 保育園から高校までを見通し、子どもの発達段階に応じた系統的・段階的なカリキュラムと学習の効果を評価し、フィードバックして改善していく、仕組みづくり、環境づくりが必要である。

(2) 各学校・保育園では、町の「地域創造学」の方針・内容を十分に理解し、テーマに沿った実践を積み重ね、交流していくことが必要になってくる。

【グローバル学習研究部会】

テーマ

「発達段階に応じた人間関係形成力を身につけさせるための指導法の研究」

目指す子どもの姿

「園児・児童・生徒が他と協働するために積極的に働きかけようとする姿」

研究の内容と方法

- ①部会の組織を「英語科」「英語以外の教科」「領域・行事」の3部会とし、それぞれ「人間関係形成力」の育成に資する授業等の実践をまとめる。
- ②実践の中から「人間関係形成力」の育成に有効なものがあれば、次年度に各校で実践していただくよう願います。

実践内容

1 「英語部会」 世田米保育園 有住保育園 有住小学校 住田高校

国際理解活動、外国語活動、英語科における授業等の実践交流（参観、

2 「領域・行事」 世田米小学校 有住小学校 有住中学校 世田米中学校

①世田米小学校

実践・・・世田米保育園年長児との交流「幼児レース補助」「学校をたんけんしよう」

ことばの教室～自立活動～

実践・・・《話す》「サイコロトーク」「ことばのくんれん」「ことたぶ」

《聞く》「聞き取りワークシート」《書く》「筆圧のコントロール」

《気持ち》「絵カード」

成果

- ・園児と話をしたり、自分の考えを伝えたりしながら交流を図ることができた。
- ・園児にあったコミュニケーションすることで社会的実践力としてのコミュニケーションに関わる力を育むことができた。

②有住小学校・・・「運動会応援練習」「校庭草取り作業」「音読朝会」「朝ランニング」「業間縄跳び」

③有住中学校・・・《地域学習》1年「自然・環境」2年「産業・観光」3年「生き方」※ポスターセッション実施

④世田米中学校・・・「住田の未来と住田を支える人々」

Step1「住田町の過去と現在」Step2「住田町で働く～職場体験～」

Step3「住田を支える人々～企業調査～」

Step4「ふるさと住田の輝く未来～未来会議～」

⑤住田高等学校・・・「SUMITA ADVENTURE PROGRAM」

「バースデーライン」「ジャンケンゲーム」「積木自己紹介」「自己紹介バスケット」

「足し算トーク」など高校生活への円滑な導入と学年の人間関係づくり

課題

部会をさらに3部会に分け、各校種とも「人間関係形成力」育成のために様々な取組ができたことが成果だった。しかし、発達段階に応じた「あるべき姿」を明確にした上で取り組む点に課題を残した。

【いのちの学習研究部会】

テーマ

「地域づくりを主体的に目指し社会に参画していく力を育成する授業づくりを進めることによって、小中高の連携を密にし、情報を共有し、お互いをよく知るにより向上心溢れる生徒を育成する。」

目指す児童生徒の姿

社会参画に関する力を身につけた児童生徒→

どのように「社会」をつくっていくのか、主体的に貢献していこうとする態度や社会づくりへの提案ができる力を見につけた児童生徒

- 1 【価値を見出す力】...良さを知る・気づくことができる児童生徒
- 2 【創造する力】...未来をイメージできる・企画力を身につけた児童生徒
- 3 【提言する力】...響かせる・発信・行動・実践できる児童生徒

※数値目標設定無し→上記の目指す姿に迫るために、地域の資源を活用した体験活動を通じ、ポートフォリオを積み重ねていくことで検証を図っていく

研究の内容・日程

1 第1回部会（5／1（月）） 2

第2回部会（8／1（火））

（1）テーマの設定及び研究内容の確認

（2）地域文化選択講座打合（3）中高連携交流授業（住田高校出前授業）打合

3 地域文化選択講座（9／13（水））

（1）会 場：住田高等学校 他

（2）対 象：住田高等学校生徒（1～2年）世田米中学校及び有住中学校3年生

（3）内 容：地域文化選択講座（5コース）

＜①五葉山森林公園森林浴、②種山ヶ原散策、③郷土料理、④林業体験、⑤住田の歴史

（砂金採り）＞

4 中高連携交流授業①（1／23（火））

（1）会場・対象：世田米中学校・世田米中学校2年生

（2）教 科：国語「古典分野（徒然草）」

（3）授 業 者：住田高等学校 教諭 三 浦 天 豪 氏

5 中高連携交流授業②（12／4（月））

（1）会場・対象：有住中学校・有住中学校2年生

（2）教 科：理科「化学変化」

（3）授 業 者：住田高等学校 教諭 金 友 和 氏

6 小中高連携交流授業

（1）世田米小学校（総合的な学習の時間・国語科—6年生）

（2）有住小学校（生活科—2年生）

（3）世田米中学校（総合的な学習の時間—2年生）

（4）有住中学校（地区一斉活動）

（5）住田高等学校（上記4・5参照）

（6）学校保健活動（乳児ふれあい体験）

7 第3回部会（2／14（水））

研究内容の進め方について

- 1 中高連携部会の発展として昨年度より設置された本部会であるが、部会の名称と実践を通して明らかにしていこうとする児童生徒の姿に部員個々のズレが生じていることを補完する手だてを講じる必要がある。

そこで、各校で具体化した研究を通して目指す資質・能力を身に付けた姿のなかで、主として社会参画力に係るものに合致する体験活動の実践を位置付け、本部会の目指す児童生徒の姿に迫ることとした。

- 2 上記により、各校より持ち寄った体験活動から目指す児童生徒の姿を検証するため

に、ポートフォリオを活用して共有や明確化を図っていく。重複する取組であっても同一校種ごとに他校のよさを知り自校に役立てる機会となったり担当ごとの情報共有がより活発に行われるようになったりする等、横軸の積極的な連携につながることから、それぞれ持ち寄る活動を大切にしていく。

- 3 各校より持ち寄った体験活動から考察した目指す児童生徒の姿を、さらに「III目指す児童生徒の姿と数値目標」に示した項目やステージごとに身に付けさせたい力にも位置付けることで、研究の成果と課題を明らかにしていく。

研究の成果と課題

- 1 地域の資源を活用した体験活動を実施し、ポートフォリオを活用しながら、主に社会参画力に係る各校で目指す児童生徒の姿を明らかにすることができた。

このことにより前年度にもまして、重複する取組であっても同一校種ごとに他校のよさを知り自校に役立てる機会となったり担当ごとの情報共有がより活発に行われるようになったりする等、横軸の積極的な連携がなされるようになってきている。

- 2 社会的実践力としての「社会づくりに主体的に貢献する社会参画力」を育成する効果的な体験活動を探究する素地がつくられつつある一方、部会の名称に活動の幅が狭められる傾向が見受けられた。

【就学前教育研究部会】

テーマ

「自立の基礎を育てる指導の在り方」 ～保育園と小学校の望ましい交流を通して～

研究の目的

生涯学習の基礎としての就学前教育における保育・教育の在り方，保育園と小学校の連携について研究を行い，将来自立して生きることのできる人間の基礎的素養の育成に資する。

目指す園児，児童の姿

- ・ 憧れをもって生き生きと生活する園児
- ・ 園児の手本となり，やさしくお世話する児童

研究の内容

- (1) 保育園と小学校との望ましい連携の在り方について，具体的実践を通して明らかにしていく。
- (2) 義務教育への円滑な移行を促すために，自立の基礎を育てる指導の在り方について，体験的な相互交流を通して明らかにしていく。

活動内容

【保小連携事業の実施】

世田米地区 月 参加者	内	容
保育園 小学校		

5 年長 5 年 運動会の交流
 5 未満児 6 年 保育体験
 6 職員 1 年 参観 給食 情報交換
 8 保護者 職員 就学懇談会
 10 年長 5 年 校舎案内
 1 年長 職員 保育体験 参観
 2 年長 1 年 一日入学

有住地区 月 参加者 内 容

保育園 小学校

5 年長 5 年 運動会の交流
 6 職員 1 年 参観 給食 情報交換
 7 年中長 職員 保育体験 参観
 7 保護者 職員 就学懇談会
 8 年長 2 年生 プール交流
 10 全園児 1・5 年 ハロウィン交流
 11 全園児 全児童 ロードレース応援
 12 年長 1 年 森林学習交流会
 2 年長 1 年 一日入学
 6 職員 1 年 参観 給食 情報交換

6 成果と課題

(1) 成果

- ・ 交流の準備や当日の活動に、主体的、計画的に取り組むことができた。
 (感じとる力) (課題解決力)
- ・ 園児に接することで、小学生は園児のことをよく考え、優しい態度で接することができた。
 (他者と向き合う力)
- ・ 園児を喜ばせるための計画や準備を、仲間とともに力を合わせて進めることができた。
 (協働する力)

(2) 課題

- ・ 地域創造学における就学前教育部会の位置づけについての共通理解が不十分だった。
- ・ 来年度より施行される保育所保育指針と「すみた幼児教育（保育）プラン」についての共通理解を図る必要がある。

(2) 具体的な取組：各学校での取組

各学校においては、総合的な学習の時間を中心として、地域創造学へとつながる学びについて実践及び検討を行った。各校内研究組織の中で、現在の実践（各教科・領域）についてふり返り、育てたい子どもの姿を共有する過程で、「地域創造学」を設置することの有用性を実感する学校の声も聞かれた。

【各小・中学校の取組】

（各学校研究のまとめレポートは別冊資料参照）

世田米小学校

研究主題

人間関係形成力を育む対話的な授業のあり方

～言語活動で培った国語力を通して～

研究の目標

言語活動で培った国語の力を通して、対話的な授業の在り方を研究し、活用できる力につなげ、人間関係形成力をつけていく。

研究内容

1 コミュニケーション能力を高め、人間関係形成力を育むための工夫

- ・授業における対話的な活動

※住田町教育研究所の目標に沿った研究によるため、教科は問わない。

2 「地域創造学」にかかわる学習計画の作成

(1) 育成したい資質や能力の明確化 ※追記



※研究所追記：

左の様に、これまで学校で行っていた教育活動を、研究で目指す大きく3つの力と照らし合わせながら、整理・分析を行う作業を全ての学校で実施した。

同じような力を目指す活動が多く重なっていたり、目指すべき力と整合する活動に偏りがあったりすることなどが見出され、その後の資質・能力の整理へとつながった。

・教科や領域、学年などにとらわれず児童に付けたい力を出し、地域創造学との関わりを考えた。

・自律的活動力・人間関係形成力・社会参画力との関わりや、ステージ（発達段階）を分類・整理し「総合的な学習の時間」「生活科」「行事」の内容との整合性を確認した。

・「育てたい力」と「活動」との整合性が取れていない単元があることが分かった。

(2) 既存の教科や領域を横断的にとらえた教育課程の編成

成果と課題

1 コミュニケーション能力を高め、人間関係形成力を育むための工夫

【成果】

・3学年総合的な学習の時間においては、話し合う視点がはっきりとしていたことで、児童がそれぞれの方法の良さを見つけ、最後まで主体的にいきいきと話し合いを進めることができた。

・4学年社会科では、資料の工夫により児童の気付きを引き出すことができた。

・6学年外国語活動では、扱う話型を様々な形で繰り返して発音し、読んだり書いたりする活動も入れ、十分に表現に慣れてから会話に入ったことで、児童が自信を持って話す活動に取り組むことができた。また、1回のやり取りだけではなく、自分なりの返事をするこ

ともできた。

- ・各教科において、ねらいを達成するために有効なペア・グループ学習について考えることができた。
- ・総合的な学習の「探究的な学習の指導のポイント」について学ぶことができた。
- ・教科横断的な学習の考え方について知り、地域創造学の中にも取り入れていくことを確認することができた。

【課題】

・「対話的な学び」の捉え。「子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める学び」であることを認識し授業の在り方を考えていく。

2 「地域創造学」にかかわる学習計画の作成に関わって

【成果】

- ・今後も見直しを繰り返し、よりよいものにしていく必要はあるが、各学年の年間指導計画を作成することができた。
- ・6年間を見通す活動テーマを掲げることで、軸がぶれることなく各学年での活動を仕組んでいくことができると考え、テーマを設定した。
- ・新しい単元、地域教材となりうる活動を職員間で話し合ったことで、「住田への気づき」ができた。

【課題】

・どうしても「現行の単元」がベースになっている傾向がある。「『住田が好き』という人材の育成」がベースとしての単元にならなければ「地域創造学」に結びついていかず、まだまだ思考の転換や柔軟さが必要である。

・本校で作成している学習計画が、他校と足並みを揃えたものになっているか、保育園から高校までのなめらかな接続を叶えるものとして適切なものになっているのか、他校との情報交換の場が持てず、確認ができていない。

- ・「めざす力（姿）」「テーマ」から活動（単元）を設定していったが、「つけたい力」の具体と、その力を育てるための活動の展開は、今後実践しながら探っていかなければならない。

有住小学校

研究主題

生きて働く社会的実践力の育成をめざして
～「自立的活動力」「人間関係形成力」「社会参画力」を育む実践を通して

本年度の具体的実践

- 地域創造学に関連が深い「生活科・総合的な学習の時間・外国語活動」で研究授業を行う。
- 各学年の「生活科・総合的な学習の時間・外国語活動」の年間指導計画の見直しと精選を行う。※生活科と総合的な学習の時間を中心に

研究攷の実践

- ①生活科・総合的な学習の時間・外国語活動で研究授業を行う。

- ② 1, 3, 4 学年の実践を報告し合う。(動画を用いて) ※追記
- ③ 森林環境学習について全学年、単元計画を作成し、実践も記録する。
- ④ 社会的実践力を「自立的活動力」「人間関係形成力」「社会参画力」と捉え、それらを意識した実践をする。



※研究所追記：

有住小学校の生活科、総合的な学習の時間の授業研究会においては、単元全体を映像記録した資料を編集し、参加者全員で視聴しながら協議を行った。校外での体験活動は他学年の教員が様子を参観することができないことが多いため、同じ学校内でも共通理解が難しいという課題から、研究会の持ち方を工夫したものである。

これまでは1単位時間の研究授業を限られた教員のみで参観することの多かった研究協議会の持ち方に、新たな視点で取り組んだ例である。単元全体を見通して学びをデザインすることや、授業者が発問等について客観的に振り返ること、また学校全体が同じ歩調で地域創造学の構築に向かって行く機運にもつながっている。

研究の成果と課題（成果◎ 課題△）

1 成果

（1）単元計画の作成について

◎ 年間指導計画を組み込んだことにより、他領域との関わりや他単元実施の見通しを持つことができた。

◎ 学習指導案のように単元名や単元設定の理由・指導計画だけにとどまらず、学習活動の実際を記入したことにより、どのような活動を行ったのか、次に受け持つ教師がイメージを持ちやすくなった。

△ 「6 指導計画」の中に「関連する教科」をしっかりと明記することが大切である。

（2）ゲスト・ティーチャー（GT）について

◎ 事前に打ち合わせをすることで、学校側の意図やねらいを共有することができた。

◎ 体験の場では、大変ありがたい役割を果たしていただいた。学びを追求していく中で疑問に答えていただいたのは大変良かった。

- ◎ 住田の森林等に精通している方々なので、やはりインターネットや本などより詳しく知ることができたので良かった。
- ◎ G Tに学校側のねらいを知ってもらうためには、単元最後の発表会に来ていただくことは有効であった。
- △ しっかりと授業のねらい、内容等を打ち合わせすることが必要である。限られた時間の中で、学校側の意図をG Tに伝えるのは難しいが、できる範囲で行う。
- △ 子ども達が課題意識を持ち、進んで課題解決ができるように、どの場面でG Tを活用するのが有効か検討したい。
- △ G Tにねらいから外れないように授業に参加してもらうためには、打ち合わせと一緒に細案が必要である。
- (3) その他（単元の流れ、探求的な活動、年間計画の関わりなどなど）
- ◎ 報告会で、動画を見ることで、具体的に活動をイメージすることができた。
- △ 森林環境学習に限り、単元計画を作成した。子どもの実態に応じて、付けたい力や単元の流れは再考していかなければならない。
- △ 探求的な活動に関わって、3年から6年までの学習活動に系統性を持たせ、付けたい力を段階的に位置付けていきたい。
- △ 子どもたちが課題を解決する時間・追及する時間を十分に確保してあげることが大切である。
- △ 森林学習の単元計画だが、文面が長いように感じる。その単元に関わる付けたい力や子どもの実態のみを記入するなど端的に記入する必要がある。活動の実際は次年度のために書き溜めておきたい。

7 来年度の研究の方向性

今年度、探求的な学習の過程において、子どもが願いや思いをもち、粘り強く主体的に課題解決に取り組むことに課題があることがわかった。来年度は、子どもが願いや思い、課題意識をもち、主体的に取り組むためには、どのように体験的、探求的な学びを位置付けていけばよいかを研究していく。実践を記録して校内研究会で報告し合い、成果や課題を共有しながら研究を深めていきたい。

世田米中学校

研究主題

よりよく理解し考え表現する方法を身につける授業の展開
～効果的な学び合いをとおして～

研究の目標

言語活動で培った国語の力を通して、対話的な授業の在り方を研究し、活用できる力につなげ、人間関係形成力をつけていく。

研究の方法

【Ⅰ】世中授業スタンダードに基づく各教科・領域の授業実践

世中授業スタンダード

(1) 学習の見通し（学習課題の設定）

① 到達目標の提示

- ・何を、どのようにできればよいのかをつかむ。
- ・どのように学ぶか内容とプロセスを見通す。

(2) 学習課題を解決するための、主体的・協働的な学習展開（効果的な学び合い場面の設定）

展開	鍛えたい技能	学習形態	学 び 方
情報分析	読むスキル	全体	読み取れる事実を挙げる（根拠を問う）
思考・判断	話すスキル 聞くスキル	小グループ	意見を受容する（ありのままに受け入れる） critical thinking（それでよいか問い直す）
表現	書くスキル	個人	課題解決する（1.主張2.根拠3.補足4.結論）

※ (2) +α 基礎・基本の確実な定着のための手立て

（問題解決的な学習と定着のための活動の有機的な関連付け）

② 活用において

- A) 活用問題を取り入れ、教える・教えられる場面を設ける。
- B) 生徒の主体的な活用を促す。（自分でやってみる家庭学習へのつながを図る）

③ まとめにおいて

- C) 教科書を使って本時の学習内容と教科書の内容との関連を確認する。
- D) 新たな知識・技能、見方や考え方を整理する。
- E) 既習内容との関連や相違を確認する。

(3) 学習の振り返り（自分自身の特徴や能力の客観的な把握）

④ 本時（単元）の目標達成状況の確認

- ・何がどの程度できるようになったか。
- ・分からない点やできないことは何か。
- ・学習活動のよさや自分自身が変わったことは何か。

【Ⅱ】実態調査と分析

- ・県学調等の結果分析

研究の課題

- ① 「見通し」→「学習活動」→「振り返り」のバランスを考えて授業を実践することが難しかった。
- ② グループ学習など生徒による「表現」に重点を置き、生徒の「理解」の定着を促す活動を充実させることができなかった。
- ③ 「振り返り」のねらい・内容・方法について、十分に吟味・検討することができなかった。

【課題① 「見通し」→「学習活動」→「振り返り」のバランスを考えた授業実践】

各教科・領域の授業で、生徒の主体的で協働的な深い学びを保障する活動を導入する中で、「教職員による授業の見通しが不十分で、グループ学習に多くの時間を費やしてしまい、『学習課題のまとめ』や『振り返り』の活動に至らないことがあった」、「教職員による授業の見通しが不十分で、グループ学習に多くの時間を費やしてしまい、『振り返り』の内容を交流する時間を

生徒への支援の計画が不十分で、活動中の補助発問や補足的な説明が多くなり授業がおしてしまうことがあった」といった課題・悩みが挙げられた。

課題・悩みの克服に向けて、今後、次の３点について取り組むことが求められるだろう。

ア) 単元及び一時間の授業についての見通しを具体的に持つこと。

イ) 授業のねらいと学習活動を吟味・検討するなど学習活動の精選を図ること。

ウ) 主発問に対する下位の生徒の反応を予測し十分に支援の手立てを計画すること。

【課題② 生徒の「理解」の定着を促す活動の充実】

各教科・領域の授業で、生徒の主体的で協働的な深い学びを保障しようと取り組む中で、「表現活動に重点を置いてしまい、基礎的・基本的な知識・技能の習得を保障する活動を充実させることができなかった」、「生徒達から挙げられた言葉を、各教科の重要語句に置き換えるなど、語句の意味理解を深める活動を充実させることができなかった」といった課題・悩みが挙げられた。

課題・悩みの克服に向けて、今後、次の３点について取り組むことが求められるだろう。

ア) 単元を通して習得させる基礎的・基本的な知識・技能を具体化し、その内容を習得させるための活動を単元内に位置づけること。

イ) 「振り返り」をもとに、授業だけでは不十分なことを自分で考えて取り組むことができるような支援を検討すること。

ウ) 「家庭での時間の使い方を見直し、決まった時間に勉強する学習習慣を身に付ける指導を繰り返す」など、家庭学習の取り組みについての支援を検討すること。

エ) 授業と連動した家庭学習を実施すること。(継続)

【課題③ 「振り返り」のねらい・内容・方法についての吟味・検討】

各教科・領域の授業で、生徒の変容を見とろうと「振り返り」に取り組む中で、「生徒と教職員の間で、「振り返りシート」のねらいや書き方について共有化が図れず、授業の感想文にとどまってしまうことがあった」、「他教科の先生方が、『振り返り』において、どのようなねらいを持っているのか、どのような観点で記述させているのか、どのような方法を用いているのか、興味がある」といった課題・疑問が挙げられた。

課題・疑問の克服に向けて、今後、次の二点について取り組むことが求められるだろう。

ア) 各教科・領域の授業で扱う「振り返りシート」について共有・協議する機会を設けること。

イ) 校内研究等を通して、教職員による「振り返り」のねらい・方法等についての研究に取り組むこと。

7 次年度に向けて

新学習指導要領のねらい、地域創造学の本格実施等を踏まえると、より一層、「主体的・対話的な深い学び」を実践することが求められている。今年度の研究成果・課題をいかし、次年度も「生徒達で課題・問題を発見し、その課題・問題の解決方法を吟味・検討しあい、問題・課題を解決する力」を育むことを目指していきたい。

有住中学校

研究主題

自らの思いを主体的に発信し、他者の意志を理解する
コミュニケーション力の育成

研究の目標

言語活動で培った国語の力を通して、対話的な授業の在り方を研究し、活用できる力につなげ、人間関係形成力をつけていく。

研究の内容と方法

(1) 本校生徒の実態把握

- ① 各種学力調査の結果分析。
- ② Q-U, 学力調査での生徒質問紙の分析。
- ③ 学習アンケートの実施（各学年1回）。各学調質問紙調査との比較。

(2) 考えを交流する場で、他者に分かりやすく伝える授業

- ① 考えを交流する場面の設定（どのような内容で設定できるか）。
- ② 他者に分かりやすく伝える方法の指導

(3) 人間関係形成力が育ったかの考察

- ① 学習アンケートによる自己評価。
- ② 各種学力調査質問紙の結果分析（経年変化）。

研究の成果と今後の課題

1 成果

(1) 本校生徒の実態把握

4月に実施されたNRT,全国学調,新入生学調の分析を実施後すぐに独自に行い,落ち込んでいる内容を早めに把握することで,基礎・基本的な知識ならびにコミュニケーション力に関わる内容の定着のための事後指導に生かすことができた。

また,全教員で各種学力調査の質問紙や学習アンケートを分析することで,より生徒の実態を客観的に把握し,研究授業の指導案に生かすことができた。また,家庭学習の取組の改善など,これまでの取組を見直すことができた。

(2) 考えを交流する場で、他者に分かりやすく伝える授業

内容に応じてペア学習,グループ学習など指導形態を工夫しながら,考えを交流する場を以前より多くつくった。何度も行うことで,生徒たちも問題解決のために自然と集まって考えを交流する姿が見られてきた。

また,意見交流の場面で,より分かりやすい説明をするために自分の考えをより深めなければならないと気づき,さらに仲間と話し合ったり,調べたりする生徒がいた。

(3) 人間関係形成力（コミュニケーション力）が育ったかの考察

4月の新入生学調の「話すこと・聞くこと」の領域の正答率が高い（82.3%）ことから,小学校での指導がしっかりなされていること,全国学調でも全国・県と比べ高い正答率であることから前年度の研究主題の「一人一人の考えを交流,共有し,よりよい考えに高めていく授業」の成果と考えられる。

10月の2年県学調では,英語の「聞くこと」の領域の正答率が85.3%と昨年度の正答率を+4.4%上回った。また,国語の「話すこと・聞くこと」の領域の正答率は53.7%と県より低かったが,昨年度の県比と比較すると増加した（H28...91.9→H29...93.2）。英語

科を中心にコミュニケーション力を育成する指導を継続して行った成果と考えられる。『地
授業以外にも全校下二シラフや生徒朝会での『ウララクスビニ』,10月に行った『地

域学習発表会」，2月に行った「ブックトークグランプリ」において全校や他学年に話す機会を設け，コミュニケーション力を育てる土台ができた。

2 課題

「コミュニケーション力」は育ってきているが，それを生かす機会がまだまだ足りないと思う。伝える相手がいてこそその「コミュニケーション力」なのであるが，現在は学校内の同級生，先輩，先生方に限られている。住田町の「地域創造学」の取組で小学生，高校生，高齢者などさまざまな人たちと交流することでコミュニケーション力が育つと思う。そのような機会を今後増やしていきたい。

また，昨年度の課題で示した「自分から積極的に行動する生徒が少ない」という面が，依然として改善されなかった。宿題や家庭学習ノートに取り組むなど，教師の指示を素直に聞くことはおおむねできるが，指示（課題）が出るまで何もしない生徒が多い。1月の学習アンケートの自己肯定感の結果を見ると，「自分にはよいところがある」と肯定的（1，2番）に反応した生徒は3年生が100%であるのに対して2年生は77.7%，1年生は33.3%と来年度は自己肯定感の低い生徒の割合が増加する可能性がある。今後も，授業内で考えを交流する活動から，自分の考えを認めてもらう機会を増やし，自信をもてる生徒を増やしていきたい。

これらの課題を改善するためにも「考えを交流する場で，他者に分かりやすく伝え，理解し合う授業実践」を継続していきたい。そして，住田町「地域創造学」の「人間関係形成力：自らの思いを主体的に発信することと，他者の意志を理解するコミュニケーションの力」を身に付けさせ，日常生活でも他と協働しながら，困難に立ち向かえる生徒の育成を目指していきたい。

5 評価に関する取組について

（1）研究開発委員会と運営指導委員会の開催

研究所運営委員会として年に2回開催している会議において，各小・中学校長，県立住田高等学校，各保育園長，副校長会代表，教務主任代表と研究開発の内容や方向性について検討を行った。また，この2回の研究開発委員会の他にも，年7回の校長・園長会議（内3回は拡大開催として高等学校長出席）の中で，研究開発についての検討，協議を行ってきた。

また，7名の外部有識者による運営指導委員会を組織し，研究について専門的見地から直接ご指導をいただくことができた。

【運営指導委員会】

組織

氏 名	所 属	職 教 名	備考（専門分野等）
田代 高章 山 本 奨 後 藤 頭一 毛内 嘉 威 武藤美由 紀	岩手大学教育学部 岩手大学教育学部 東洋大学食環境科学部 教授 秋田公立美術大学 岩手県教育委員会学校主任指導主事 教育課	本学教 授 副学長 主任指導主事	教育方法学 学校臨床心理学 教育課程 道徳教育、教育課程

千葉 賢一 杉田 哲朗	岩手県教育委員会沿岸 主任指導主事 南部教育事務所 指導主事	
----------------	-----------------------------------	--

開催記録（詳細は別冊資料の議事録）

	開催期日 場所	内 容
第1回	平成29年8月10日 住田町役場	【指導助言者】 岩手大学教育学部 田代 高章 教授 山本 奨 教授 岩手県教育委員会学校教育課 武藤美由紀 主任指導主事 岩手県教育委員会沿岸南部教育事務所 千葉賢一 主任指導主事 杉田哲朗 指導主事 ・研究の方向性や計画等についての指導助言 ・29年度の8月までの研究状況について
第2回	平成30年2月14日 住田町役場	【指導助言者】 岩手大学教育学部 田代 高章 教授 岩手 県教育委員会沿岸南部教育事務所 千葉賢一 主任指導主事 杉田哲朗 指導主事 ・研究の方向性についての指導助言 ・29年度自己評価書、30年度実施計画書に ついて
第3回	平成30年3月22日 岩手大学教育学部	【指導助言者】 岩手大学教育学部 田代 高章 教授 山本 奨 教授 東洋大学食環境科学部 後藤 顕一 教授 岩手県教育委員会学校教育課 武藤美由紀 主任指導主事 岩手県教育委員会沿岸南部教育事務所 千葉賢一 主任指導主事 杉田哲朗 指導主事 ・研究のまとめに対する評価と次年度計画につい ての指導助言 ・29年度実施報告書、30年度実施計画書（修 正版）について

(2) 教育研究所全体会の開催について

町の教育研究所では、町内小・中学校教諭、県立高等学校教諭、町内保育士を研究員として委嘱し、年4回の全体会開催を通じて各校の取組の共有を図っている。

【今年度の研究所全体会の開催】

	開催日	出席人数 小中高教員 保育士	会場	内容
第1回	5/1	60人	住田町役場 町民ホール	今年度計画確認、部会開催
第2回	8/1	60人	住田町役場 町民ホール	・学校毎研究の中間報告 「検討した目指す資質・能力について」 ・文部科学省渋谷一典氏による講演「住田町の研究開発学校の意義と今後の研究推進に向けて」
第3回	1/9	60人	住田町役場 町民ホール	・研究発表会 「4つの研究部会による実践研究発表」 ・運営指導委員後藤顕一氏による講演「地域でつくるこれからの学び」
第4回	2/14	60人	住田町役場 町民ホール	・今後の展望について ・ス テ 画 に う て 協 議 導 計

写真：2月第4回全体会の様子



（３）教育研究所の組織について

各部会での取組をととして異校種の教員が交流し互いの実践について相互理解を図ることと、各学校の校内研究において、目指す資質・能力の検討と実際の教育課程実施に向けての準備を行うことを通じ、町の教育研究所体制について改編の必要性が議論されるようになった。30年度から地域創造学を据えた教育課程を実施しながら、その成果や課題を継続的に検証していくために、研究所の組織を大幅に改編し、取り組んでいくこととした。

表5-1 【H 2 9年度研究所組織図】

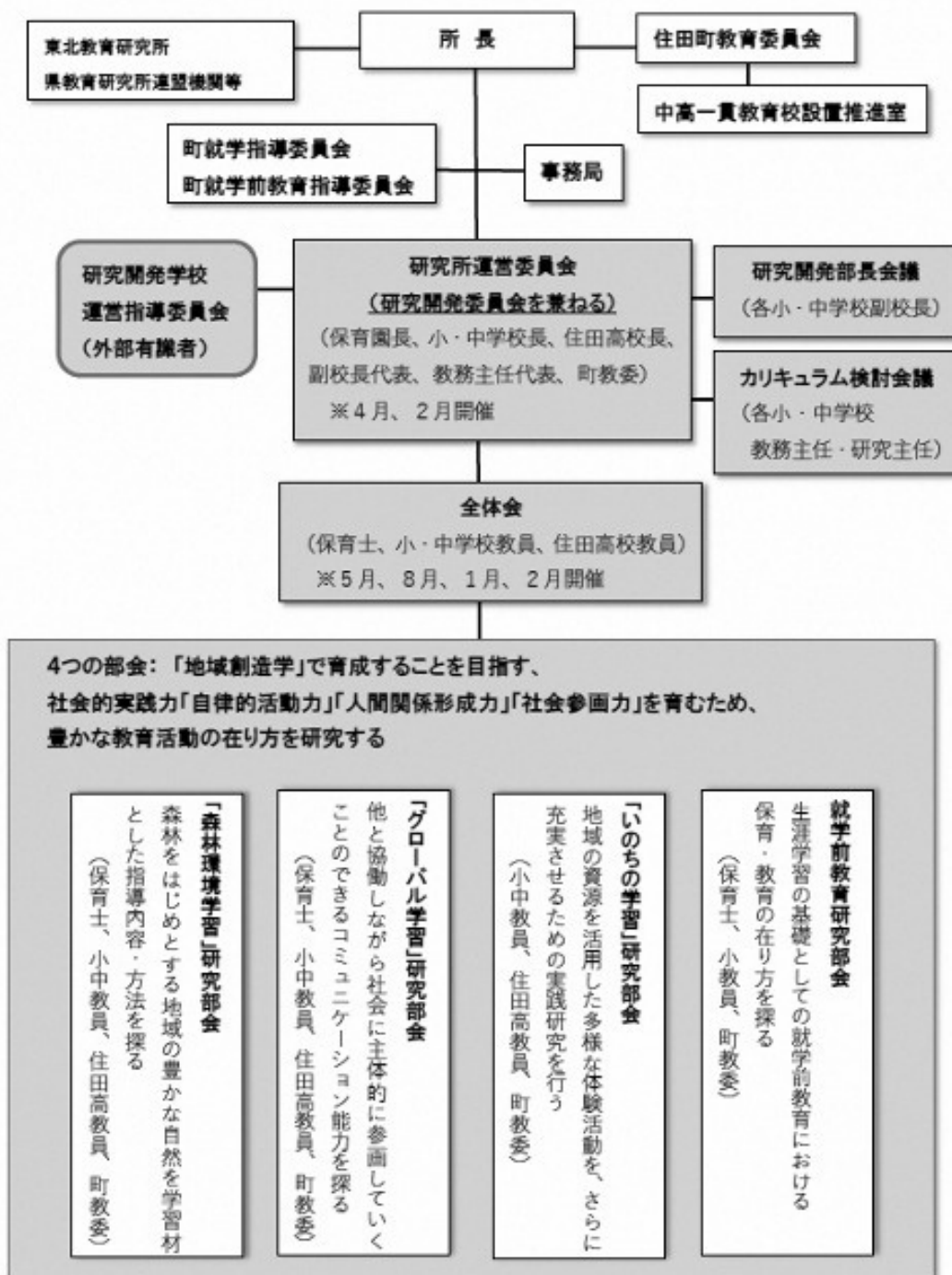
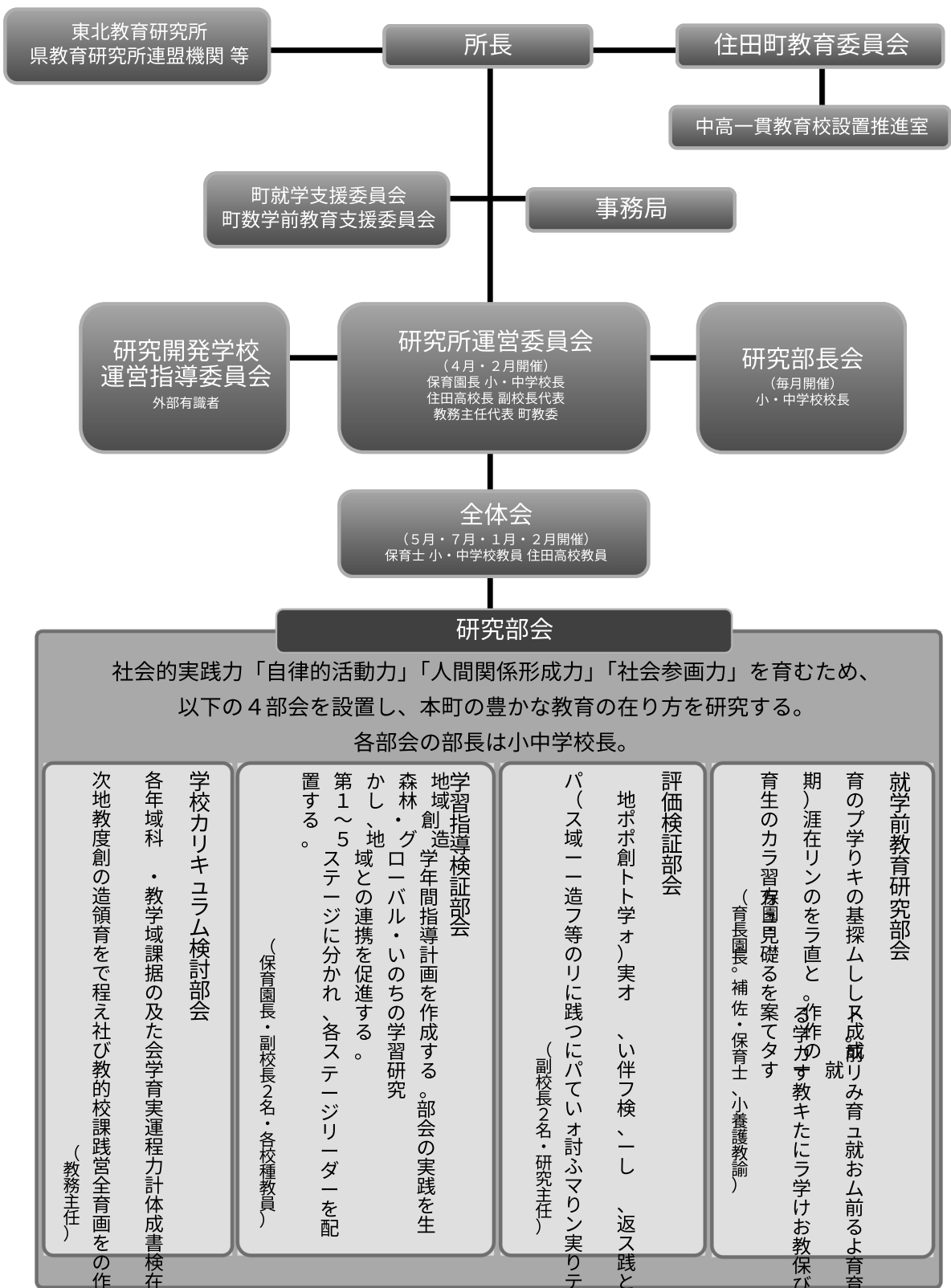


表5-2 【H30年度研究所組織図案】



地域創造学を軸とした教育課程全体を見渡しなが、3 1年度以降の教育課程について検討、構築していくための部会と、地域創造学の実践と検証を並行して行っていくための部会へと再編を行う。各校種の教員は、第1〜5ステージ毎に分かれて部会活動を行う。

(4) 具体的指標の開発について

本研究の目指す資質・能力には、意欲や心情など、非認知的能力も含まれることから、その力を評価するためには、多面的・多角的な見取りのできる指標が必要となる。

本町研究開発の取組でも、パフォーマンス評価について検討していくが、重視したいのは、学習者自身の「振り返り」や「メタ認知」する機会をどう設けた評価とするかという点である。どのような評価内容なのかを学習者が理解していない状況で指導者の主観によってのみ評価を行うのではなく、学習者が次への課題や展望を見出していくことのできる評価の在り方については時間をかけて協議していきたい。

例えば、ルーブリックを活用した評価は、指導者と学習者が目標を共有しながら目指す力に向かっていくためにも有効な手段である。学習者が自らの知識やスキルを使いこなし、社会的実践力として活用するまで高めることのできる指導とするためにも、実践を重ねていきたい。

また、継続的に児童・生徒の成長を見とっていくためにも、ポートフォリオ等を活用して学習者が成長を自覚することを促したり、学習者と指導者や地域の人材などが学習の内容について共有したりすることを目指し、「ノート」等を活用することを検討している。

また、目指す社会的実践力をもとに、小中学校、高等学校での評価規準を作成する。特に、校種をまたぐ学年間での具体的な指標を設定することは重要であると考えている。この時、「表３－２ 社会的実践力のとらえを各ステージに整理したもの」を基本として、評価の規準を共有していくこととなる。

今後、「地域創造学」における学習内容を明らかにするとともに、新たな評価の在り方についても本町教育の特徴としていきたい。

6 研究開発実施上の問題点と今後の方向性

(1) 新教科「地域創造学」実施に伴う、評価の在り方の検討について

新教科「地域創造学」を含む教育課程が、児童・生徒にどのような影響を与えるのか、適切な評価の在り方を検討していく必要がある。校種や児童・生徒の発達段階の違うことから、これまで同様、各校の協議と異校種での協議を続けていく。

心理尺度については、質問紙によるものを想定しており、継続的に測定する。より客観的に見取るために、町外の協力校の結果と比較しながら分析できるよ

作成準備年指導計画の単元に合わせ、ポートフォリオを活用して多角的評価が目標を共有し、学習者自身の「振り返り」がより充実する学びとなるために、ルーブリック等を活用したパフォーマンステスト等の方法を検討している。

(2) 新教科「地域創造学」を中核とした１２年間の教育課程の編成

本年度は、５つの学校において、「育成すべき資質・能力とは何か」について検討を行い、町教育研究所が分析整理し、目指す方向性を確認した。また、目指す資質・能力の系統性について

生かす準備を進めてきたが、12年間の教育課程全体がこれらの検討のみでは十分ではないため、引き続き検討を要する。社会的実践力が育っていくその発達の段階や各校種の到達点を共有していくまでには更に時間を必要とする。

平成30年度からは整理した力を新設教科「地域創造学」及び各教科・領域で育んでいくための教育課程について、年間指導計画を基に実施しながら、検証・改善を図っていく。

(3) 異校種間の共通理解

本研究には、異校種の公立学校教員が関わることから、その共通理解を図ることには、様々な困難がある。

これまで、小・中・高等学校教員が参加する全体会を開催し、今後目指すべき教育の流れについて共有したり、4つの部会に分かれて実践事例交流や研究協議を行ったりすることを通じて交流を図ってきた。

しかし、「交流」の域を脱して、議論や新たな価値を見出していく段階までは、まだ課題が多くある。年に4回「全体会」として開催してきたこれまでの積み重ねを生かしながら、異校種間の理解を深めるための機会を創出する。

(4) 運営指導委員からの指導体制について

本年度より、7名の運営指導委員の先生方のご指導を頂きながら、研究を推進していくことが可能となった。運営指導委員会を開催する上で、過半数の指導委員が一堂に会する機会を持つことの難しさがあり、個別にご指導を頂いたり、1～3名の指導委員の方々に訪問して頂いたりしながら直接のご指導を受けてきた。本年度最終となる第3回を3月に予定している。

次年度についても引き続き継続的な指導体制を整えながら進める。

(5) 持続性のある研究体制の構築

12年間の子どもの育ちを考える研究であることから、継続的に検証や改善が可能な研究組織へと体制を工夫したい。本実施報告書のp.41に示した案のように、町の教育研究所の組織体制及び他部局との横断的な連携の在り方について検討を進めている。

ダミー

色上

クリーム

表

ダミー

色上

クリーム

裏

運営指導委員 岩手大学教育学部

岩手大学教育学部 教授 高章

東洋大学食環境科学部 教授 敬 獎

後藤 顕一

秋田公立美術大学 副学長 毛内 嘉威

岩手県教育委員会学校教育課 主任指導主事 武藤美由紀

岩手県教育委員会沿岸南部教育事務所 主任指導主事 千葉 賢一

岩手県教育委員会沿岸南部教育事務所 指導主事 杉田 哲朗

研究開発学校指定校

住田町立世田米小学校 校長 佐々木英雄

住田町立有住小学校 校長 都澤 宏典

住田町立世田米中学校 校長 佐藤 智一

住田町立有住中学校 校長 三浦 政勝

岩手県立住田高等学校 校長 鈴木 広樹

研究所各部会部長

森林環境学習研究部会 世田米小学校 副校長 グロ 平藤 幸男

ーバル学習研究部会 有住中学校 副校長 いのちの 高橋 俊明

学習研究部会 世田米中学校 副校長 就学前教育研 高橋 弘寿

究部会 有住小学校 副校長 佐藤 泰彦

各校研究員

世田米小学校

今 野 幸 枝 伊藤美奈子 泉田 剛志 千葉 泰 山口 響

鈴 木 幸 枝 小原 由佳 佐藤 麻穂 松田 哲也 鈴木由美子

金野ちとせ

有住小学校

菊池 努 高橋 順子 鈴木 啓史 今野 明子 坂本早弥香

鈴木 良子 佐々木恵利 高橋 聖子

世田米中学校

及川 由美

新沼久美子

細川 遼太

村上 裕子

千葉 政弥

林 恒太

黄川田潤一

熊谷 三恵

大内真理子

有住中学校

濱口 陽子 高

橋 千尋

中渡 昭徳

高橋 芽生

黒坂 太一

半田 聖子

伊東敬一郎

小野寺晋太

住田高等学校

伊藤 正則 三

浦 天豪 小水

内俊彦 紺野

勇樹

利府 崇 菅

野 誠喜 高

橋 健太

二階堂 希

西出 和久

岡村 多恵

木田 智子

高橋 義柄

上館 倫子

松田 隆宏

金 友和

上野 律子